

ジャパニーズ・クリスマス

上野 達 弘

ドイツのクリスマス

クリスマス・シーズンにドイツを旅行する人は多い。私がミュンヘン留学中も、何人かの知人がこの時期に訪ねてきた。ドイツのクリスマス（Weihnacht）といえば、クリスマス・マーケット（Weihnachtsmarkt）



2010/12/7 14:32 @ Marienplatz

が知られている。クリスマスの4週間前、いわゆるアドベント（Advent）が始まると、広場という広場に小さな出店がたくさん建ち並ぶ。雑貨を見て歩いたり、グリューヴァイン（Glühwein）というホットワインを飲むのもお決まりである。気温は氷点下10度くらいになることもあるので屋外は猛烈に寒い。グリューヴァインの湯気と吐く息の白さがもうもうと立ち上る。

イブの風景

しかし、ドイツにクリスマス・マーケットを見に来るなら、間違ってもクリスマス当日に来てはいけない。せいぜい12月23日までである。24日には何もなくなるからだ。次頁の写真の撮影日時に注目していただきたい。



2010/12/19 18:45 @ Marienplatz

同時期に留学中だった米村滋人東北大学准教授（中央）

および加毛明東京大学准教授（右）と



2010/12/24 19:39 @ Marienplatz



2010/12/24 19:42 @ Marienplatz

12月24日というのは、クリスマス・マーケットは朝からやっていないか、遅くともお昼にはすべて終了している。レストランも夕方には閉店。かろうじて開いていた日本食レストランで食事にありついた私も、早々に真っ暗な街に放り出された。

ちなみに、ここマリエン広場（Marienplatz）は、市庁舎が所在するミュンヘンきっての中心地である。背後に見える店舗（Hugendubel という本屋）は照明がついているように見えるが、12月24・25日は両日ともに祝日なので終日閉店である。

では、地下鉄に乗って2駅先のギーゼラ・シュトラッセ（Giselastraße）に向かおう。地下に降りてみるとこの通り。



2010/12/24 19:49 @ Marienplatz



2010/12/24 19:56 @ Giselastraße

人っ子一人いないという表現がさほど大げさでない（ちなみにドイツの改札では切符のチェックをしないため駅員がいないのは普段通りである）。プラットホームも閑散としている。時計の針が見えるだろうか？そう、まだ20時前である。

外はどうだろう。駅を出たところにあるレオポルド・シュトラッセ（Leopoldstraße）は、ミュンヘン一番の大通りで、バーやビアホールなどが多数軒を連ねている。ところが階段を上がると、そこは静寂の世界。ここは普段たくさんの若者が闊歩しているし、2010年ワールドカップのときは普通に歩けないくらいに群衆であふれかえったものである。それがいまや人影もない。ちょっとくらい不良風の若者が仲間とつるんで瓶ビール（ミュンヘンに缶ビールはない）をラッパ飲みしていてもよさそうなものだが、ほとんど誰もいない。車もほとんど通らない。



2010/12/24 19:59 @ Leopoldstraße



2010/12/24 20:00 @ Leopoldstraße

ビアホールとして知られるホーフブロイハウス（Hofbräuhaus）の系列店も、ご覧の通り真っ暗である。空気を読めなさそうなマックやスタバまでもが、12月24日は早々に店を閉めた。

家族と家で過ごすクリスマス

クリスマスにおけるこうした光景はヨーロッパでは珍しいことではない。ただ、ミュンヘンは特にカトリックが強い保守的な街である。2006年以降、閉店法（Ladenschlußgesetz）は自由化が進みつつあるが、バイエルン州では従来のものであり、普段から平日は20時にすべての店が閉まり、日曜・祝日は終日閉店である。デパートもスーパーもキオスクも例外ではない（コンビニなどはもとより存在しない）。

ただ、これは彼らにとって自然なことのようだ。普段の日曜はともかく、クリスマスイブというのは聖なる夜（Heiligabend）なのであり、家族とともに家で静謐に過ごす時間なのである。外で騒ぐのはもちろん、友人と外出に出かけるということもない。厳しい教えがあるとか、宗教的に許されないといった理屈の問題ではなく、何となく気がひけるようである。

お祭り騒ぎのジルベスター

そんなドイツでも、大晦日（Silvester）には様子が一変する。次の写真とは12月31日深夜、まもなく年が変わろうかというときのマリエン広場である。暗いので写真から雰囲気が伝わるかどうか分からないが、とにかく何千人という人が繰り出している。このときは、家族というより恋人や友人たちと来ているようだ。そして午前0時を過ぎると、仲間と一人ずつハグする者、花火を上げる者、ワインを飲む者、葉巻を吸う者などなど。



2010/12/31 23:25 @ Marienplatz



2010/12/31 23:44 @ Marienplatz

年越しの定番といえば花火（Feuerwerk）である。ただ、それは日本の花火大会のような風情ではない。ドイツでは年末3日間しか販売が許されていないロケット花火（Rakete）を自前で購入して街角で放つのである。点火できる時間帯も、12月31日0時から1月1日24時までと定められているため、大晦日の昼頃からヒューヒュー音が聞こえてきて、夕方頃から激化する。

これがなかなか危険であり、ジルベスターの様子を広場に見に行くのはやめた方がよいと私も言われたくらいである。写真からサイズ感が伝わるだろうか。まるで角材が飛来してくるようなものだ。ゼミ合宿で学生がやるロケット花火に内心ひやひやしていた私だが、ドイツのこれに比べたらかわいいものかも知れない。



2010/12/30 12:50 @ GALERIA Kaufhof

日本版クリスマス

さて、ところ変わって日本である。日本のクリスマスの華やかさは諸外国に引けを取らない。もっとも、日本のクリスチャン人口は1%程度といわれているから、多くの人は「自分はクリスチャンでもないのにね」などといいながらクリスマスをお祝い(?)して買い物や外食に出かけたりする。イブの夜はクリスマス特別メニューと称する特別に高いコース料理を出すレストランも満席になったりする。

そして、何より特徴的なのは、日本ではクリスマスは恋人と過ごすものと考えられていることである。だから、「クリスマスの予定はありません」などと公言することは恋人募集中を意味する。年頃の若者がイブの夜に実家で食事したりなんかしていると家族から心配されかねない。

外からの視点

このように、外国のさまざまな文化や風習を取り入れつつ日本流のアレンジを加えた結果、本来の背景や前提が捨象され、いつの間にか日本特有のものに仕上がっていることは少なくない。女性が男性にチョコレートをあげるバレンタインデーや、ホテルや結婚式場で挙げる教会式結婚式も、欧米からみれば奇異に見えるかも知れない。

もちろん、そうしたことは日本特有の現象とは限らず、例えばドイツでも、最近はアメリカ流のハロウィーンにちなんだ商品がデパートに登場したりして、商業主義だと冷たい視線を向けられている。

ただ、柔軟性と受容力に長け、欧米への憧憬が強く、必ずしも伝統や永続性が尊ばれないようにさえ見える日本では、その傾向が特に強いように思える。

そして、このことは文化や社会だけではなく、法律についてもいえる。知的財産法も、大陸法をベースとしながら、アメリカ法などにおけ

る個別の制度を寄せ集めて、日本流にアレンジした結果、独特の姿になっているところがある。著作権法における職務著作制度というのもその一例だ。人が著作物を創作したにもかかわらず、会社の従業員の場合はクリエイタとしての立場も権利も奪われ、会社が著作権のみならず著作者人格権をも取得するという日本の制度は、世界でも極めて例外的な立法例だといわれている。

もちろん、それが結果として日本社会に適合している可能性も否定できない。ただ、そのような客観的状況について自覚的であることは重要だろう。特に日本では、地理的・文化的・歴史的な条件から、単一性の高いコミュニティにおいて自明の前提になってしまっている特殊性に気づかなくなるリスクがどうしてもつきまとうからである。そのような中、日本が国際的にみてどのように位置づけられ、どのような特徴を持っているのかを客観的に認識することは、日本法や日本社会の将来像を展望する上で必要なことと言えよう。

そんなことを書いている私も偉そうなことは言えない。帰国後1年もたたないうちに、早くも外からの視点を保てなくなりつつあるからだ。帰国直後は、日本のさまざまな光景に新鮮な違和感を覚えたものだったが、正直なところ、その実感は薄れてきている。もしかしたら次のクリスマスがやってくる頃には、日本版クリスマスも、日本法の特異性も、当然のことにしか見えなくなっているかも知れない。常に外からの視点を失わずにいたいという思いを込めて、この小稿をしたためておくことにしよう。